

カラコルム・八千米峰トリプル登頂

尾形好雄

はじめに

1993年12月、群馬県山岳連盟とスポーツニッポン新聞社は冬期サガルマータ（エヴェレスト）南西壁登山隊を派遣し、冬期末踏の南西壁から三次にわたるアタックで隊員7名中6名を厳冬の頂ぎに送り、「ザ・ハードウェイ」(*1)の冬期挑戦の幕を閉じた。

群馬モンロー主義——群馬県人による群馬のヒマラヤ登山——を標榜し、70年代当初から群馬のヒマラヤ登山を牽引してきた八木原罔明は、この登山を最後にそのバトンを名塚秀二に託した。群馬岳連の新生海外登山研究会の誕生である。

新委員長に就任した名塚の課題は、群馬の若きヒマラヤニストを育成し、群馬の次なる目標を追い求めることであった。当然、そのターゲットは冬期ヒマラヤ登山に求められた。そのためには若手の育成が急務であった。

93年に共催したスポニチにとって冬期サガルマータ南西壁登山は、結果的に創刊45周年の記念事業となった。

1998年2月1日より創刊50周年を迎えるスポニチにとって50周年にむけての“ダッシュ50”の各種記念行事が模索される中で、もう一度世界の屋根ヒマラヤを舞台にしたイベントも候補の一つとして取り上げられた。メディアの記念行事としては事故と失敗は許されない。失敗はともかく事故だけは何としても回避しなければならない。一方、群馬岳連でも前述したように究極的な課題追求の前に若手ヒマラヤニストの育成に迫られていた。

この両者の思惑の中から、比較的安全に登れて成功率の高い登山ができる8,000m峰として、カラコルムのガッシャールムⅠ峰（以下GⅠ）、Ⅱ峰（以下GⅡ）、ブロード・ピーク（以下B・P）が選ばれた。そしてどうせ陳腐な8,000m峰登山をするなら2座もしくは3座の連続登頂を試みることにした。

パキスタン政府は1986年以降、8,000m峰の許可制限を行い、1シーズンに複数の8,000m峰へのトライができなくなった。それが1993年頃より特別許可を取得すれば2座のアタックも可能になってきた。

当初この計画は1996年に実施する予定であったが、アプリケーションを提出した時点で、すでに3山とも6隊ずつ許可しているの、受け付けられないと断られてしまった。（8,000m峰は1シーズンに6隊までと限定されていた）

カラコルムの最もポピュラーな8,000m峰3山を一度に許可取得することの難しさを知った我々は

1. 登山記録

95年の年末に名塚をイスラマバードへ派遣し、97年登山隊の受付開始となる1月1日にアプリケーションをパキスタン観光省に提出し、3山を一人2山ずつトライできる特別許可の内諾を得た。(3座登頂の願いは叶わなかった)

トリプル登頂を目指して

群馬県カラコルム登山隊1997年は、星野光総隊長以下21名(ヒマラヤ初見参加者は7名)が3隊に分かれて各隊が8,000m峰2座ずつ登る計画で、勇躍パキスタンへと向かった。

先発隊がカトマンズにデポしてあった装備類をパキスタンに運び、5月30日には総隊長を除く全隊員がイスラマバードに集結した。

イスラマバードに着いてみると、今年はパキスタンの独立50周年のため特別に8,000m峰に9隊ずつ許可したと言われ、驚いた。我々が1年延期を強いられたのは何だったのだろうか。

イスラマバードでの諸準備を終えた後、陸路で隊荷をスカルドに送り、順次隊員も陸路スカルドへと向かった。

スカルドからキャラバンのスタート地アスコレヘジープで入り、6月9日、471名のポーターと共にベースキャンプ(以下BC)に向けてキャラバンを開始した。

アスコレからブロード・ピークのBCまでは通常7日、ガッシャーブルムのBCまでは8日の日程で辿り着く。(但し、ポーター・チャージは12日分支払わなければならない)我々はBCまでの高度順応のためにウルドカスで1日、ガッシャーブルム隊はさらにコンコルディアで1日余分に滞在してBCに入った。

6月16日に佐藤光由の率いるB隊がブロード・ピークのBCに入り、19日には名塚秀二の率いるA隊、後藤文明の率いるC隊がそれぞれガッシャーブルムのBCに入った。

ガッシャーブルムBCには既にG I、G IIに向かう外国隊が5隊ほど入山していたが、C 1までのルートが確保されておらず、南ガッシャーブルム氷河のアイスフォールや上部プラトー出口のクレバス帯など、ルート工作を強いられた。

6月22日よりA隊、C隊とも登山活動を開始。

はじめの2日ほど小雪混じりのすっきりしない天候であったが、その後3日間は晴天でルートも順調に延びた。27日から再び悪天に見舞われ、30日には一旦BCへの撤退を余儀なくされた。この悪天候は7月4日頃まで尾を引いたが、その後は晴天が続き、7月中(BC撤収するまで)に天候が悪かったのは10日、22日の2日間だけだった。あきらかにこれまで言われてきたカラコルムの天候周期とは違っていた。結果的にこの好天がG I、G IIの大量登頂をもたらすことになった。

7月2日、G I、G IIに向かうA隊、C隊とも登山を再開し、C 1(5,900m)に戻る。A隊、C隊のC 1は同じ場所で、ここからG IのA隊はガッシャーブルム・ラから北壁ジャパニーズ・クローワールに向かい、C隊はG II南西稜へと分かれて行く。

1. 登山記録

A隊は、3日にC2(6,400m)、6日にC3(7,100m)を建設し、そのままアタックに突入した。

7日、第一次アタック隊の名塚、江塚、品川、星野(龍)の4名は、午前3時30分にC3を出発し、頂上に向かった。頂上直下の斜面は見た目より傾斜が強く、4本の固定ロープをセットして14時26分に登頂。下降は隔時確保しながら下ったため時間がかかり、C3に帰幕したのは20時近くになっていた。

9日には二次アタック隊として宮崎とシェルパ2名が登頂し、A隊のGI挑戦は終わった。

GIIに向かったC隊は、不調者が続出し、1名はBCからヘリコプターでスカルドへ降ろすハメになった。それでも尾形、後藤の二人によってルートは順調

に延ばされ、4日にC2(6,600m)、7日にC3(7,400m)が建設された。

8日、尾形、後藤、ナワン・ドルジェの3名は、3時50分にC3を出発し、南東稜のコルを経て11時32分にGIIに登頂。

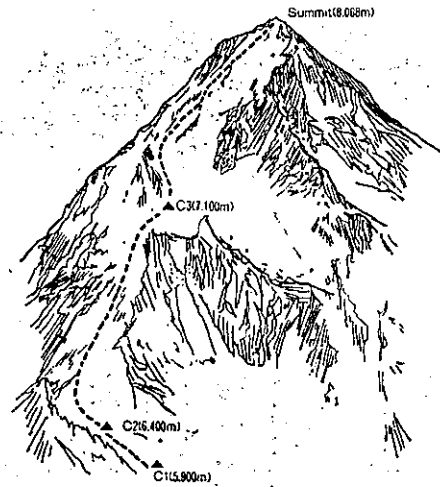
10日には二次隊として、寺田、綿貫、田島とシェルパ1名がアタックに向かったが、悪天候のため、南東稜のコルの手前で断念となった。

14日、綿貫、田島の両名は、A隊の名塚、宮崎、馬場、岩崎(栄)、江塚、品川、星野(龍)と共にGIIに登頂。この日はシェルパ3名も登頂し、大量12名もの登頂となった。国内ではもっぱらフリー・クライミングに熱を上げている田島は、20歳5ヶ月で、国内では最年少の8,000m峰サミッターとなった。

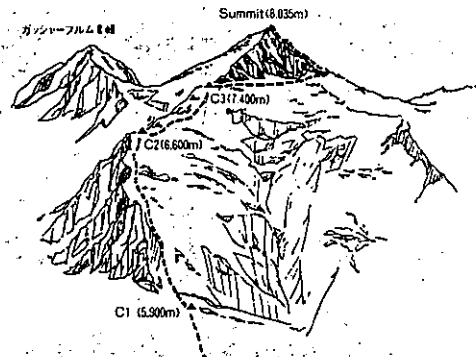
こうしてGIとGIIの登山は終了した。

一方、B・Pに向かったB隊は、BC入りしたその日に静岡隊の雪崩遭難事故に遭遇し、出端を挫かれる。

6月21日から登山活動を開始し、静岡隊のルートを使ってその日にC1(5,450m)を建設。23日にはC2(6,200m)を建設し、さらにC3へのルート工作を行おうとした矢先に天候が崩れだし、その後10日間BCに閉じ込められてしまった。この停滞がのちのちB隊のGIダブル・アタックに影響を



A隊のルート



C隊のルート

1. 登山記録

及ぼす事となった。

7月5日に登山を再開し、8日にC3(6,900m)、9日にC4(7,400m)を建設して、10日に一次アタック隊として佐藤、岩崎(洋)、梁瀬が頂上に向かったが、悪天候のため7,600m地点で断念する。

一旦BCに引き返し、態勢を立て直して14日より再度アタックに向かう。吉田(秀)吉田(文)、福本は順次キャンプを進めて15日にC4に入り、1日遅れて出発した佐藤、岩崎(洋)、梁瀬もこの日C2から一気にC4入りした。

翌16日、順応が遅れていた中島を残し、隊員6名とシェルパ2名が頂上に向かう。コルから先の頂上稜線では強風に悩まされたが、11時30分から13時30分の間に8名が登頂。

7月8日と14日にGIIの登頂を果たしたC隊は、16日と18日の2日間に分けてB・PのBCに移動した。

16日に移動した尾形、後藤、ナワン・ドルジェの3名は、1日の休養の後、18日よりB・Pのアタックを開始し、C2、C4と順次キャンプを進めた後、20日午前9時26分に登頂。

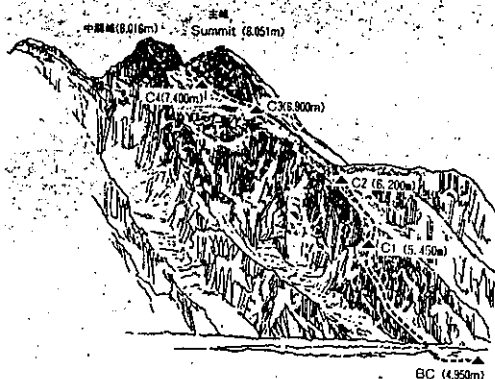
体調不良のためGIではリタイアした野沢井が復帰し、中島、寺田の3名で21日より二次アタックに向かったが、翌22日に天候が悪化し、C2で断念した。これでC隊はすべての登山を終了して、28日BCを撤収した。

B・Pの登頂に手間取ったB隊はようやく20日にガッシャールムのBCに移動したが、悪天候に見舞われ、C1への移動は23日となった。翌24日よりC2、C3に必要な最小限の装備、食糧を持ってアタックに向かったが、25日に北壁ジャパニーズ・クローワールで雪崩に襲われ、6,900m付近で断念してC1へ撤退した。

この頃になると、7月の連続した好天のため雪が緩み、コンディションは最悪の様相を呈してきた。BC〜C1間の南ガッシャールム氷河ではクレバスの転落事故が相次ぐようになり、ルートの確保もおぼつかなくなってきた。これ以上の登山活動は危険と判断し、26日B隊の全員はBCへ下降し、すべての登山活動を終了した。

登山を終えて

97年のカラコルムは稀に見る好天に見舞われ、どの山でも大量登頂が相次いだ。GIIだけでも50名近く登頂したと云われる。我々の群馬隊も三つの8,000m峰に延べ33名の登頂者を送りだして幕を閉



B隊のルート

1. 登山記録

じた。

カラコルムの最もポピュラーな8,000m峰, G I, G IIへの登山隊のモラルの悪さについて聞いてはいたが, あれほど酷いものとは思わなかった。G IIの南西稜を登るのにI本も固定ロープを持参しない隊もあった。固定ロープを使うのを良しとしないのか, と云うとそうではない。我々がルートを延ばすのをただひたすら待って, ルートができると積極的に我々の固定ロープを使って登り出すのである。この手の不快さはこれまでもチョモランマ北壁や他の山でも味わったが, 今回が最も酷いものであった。尤もそのお陰で我々はG I, G IIとも後からBC入りしたにもかかわらず, 全ルートをトップで登れる幸運を得た。

49歳になった自分の8,000m峰連続登頂を振り返ってみたい。今回の2座登頂までの行動パターンは図-1の通りである。

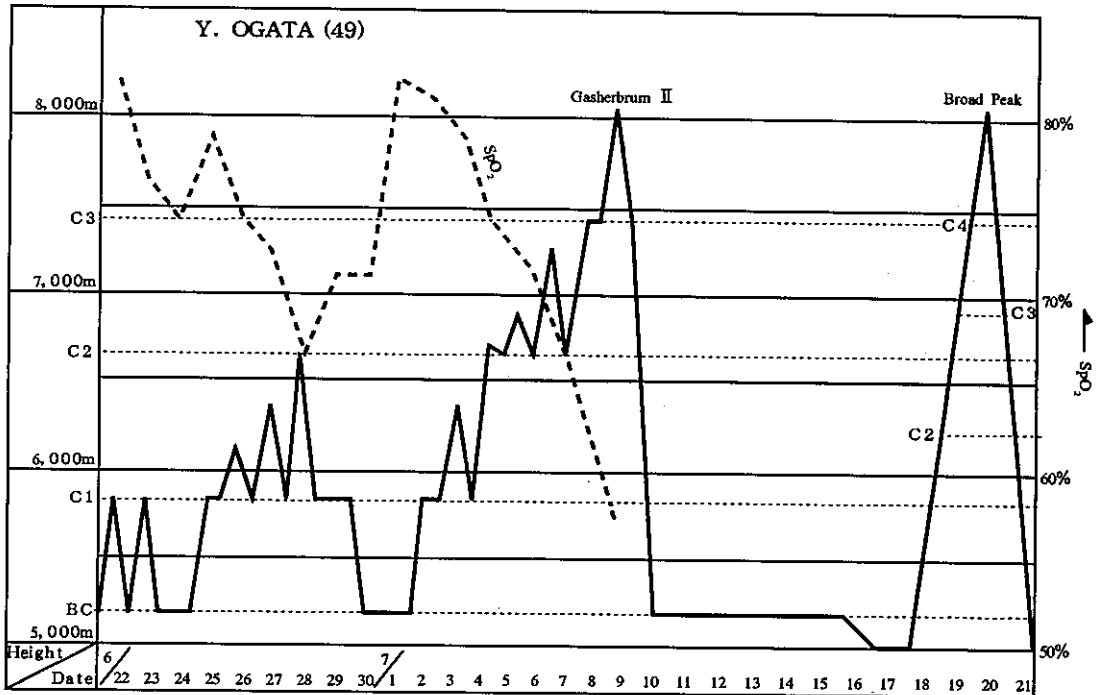


図-1

BC入りしてから, 18日目でG IIに登頂した。アタック当日C3 (7,200m)で測定したパルスオキシメーターのSpO₂は, 尾形58%, 後藤47%, ナワン・ドルジェ56%であった(測定は起床時)。これまでアタック当日ファイナル・キャンプでSpO₂を測定したことがなかったので, どの位の値で行動していたのか判らなかつたが, 余りにも低い値なのは驚いた。このような低い値でもラッセルをし, 頂上直下のナイフ・エッジ(50m)のルート工作をしながら, C3からG II頂上までの高度差835mを7時間42分(108m/hr)で登れたのである。データが少なく何とも言えないが, 頂上アタックの最終段

1. 登山記録

階では案外このような状態で行動しているケースが多いのではないだろうか。逆に言えばSpO₂値がこの位でも十分に行動出来ることが8,000m峰サミッターに必要な防衛体力（低圧低酸素環境ストレス耐性）と言えないだろうか。

B・Pへの連続登頂はGⅡでの高所疲労が酷くなかったこともあってか、GⅡと違って8,000mラインの長い頂上稜線歩きがあるにもかかわらず、楽に登れた。C4（7,400m）からB・P頂上までの高度差647mを登るのに要した時間は6時間26分（101m/hr）であった。コルから前峰を越えて主峰までの長い稜線歩きを考えるとGⅡより良いスピードで行動できたのではないかと思う。登頂後はC4を撤収して二次隊のためにデポし、C3まで下ったが、15時には帰幕できた。B・Pではパルスオキシメーターの配置の関係で、測定できなかったのが残念。どの位のSpO₂値で行動したのか興味深いところである。

ガッシャーブルムのBC入りしてから30日間で8,000m峰2座に登頂したわけだが、これは8,500mを越すような高峰登山で、8,000m付近に設けたファイナル・キャンプに2度到達したと考えれば、登れてあたりまえであろう。

何故、登れる者と登れない者がでるのか。今回ヒマラヤ初見参加者が7名参加し、その内6名が登頂した。しかし、2座に登頂出来た者は誰もいなかった。B隊の初見参加者3名はB・Pでの遅延による時間切れで、GⅠの登頂が適わなかったとしても、A隊とC隊の初見参加者4名はいずれも順化が遅れ、2座登頂は果たせなかった。どうも過去に高所履歴があるかないかで、高度順応に時間差があるように思われる。初見参加者にとってもう少し時間をかければ、2座登頂もできたのであろうか。初見参加者はルート工作、荷上げ、行動パターンなどで順化が遅れていた分、楽できたにもかかわらず、外見的高所ダメージは経験者に比べて酷かった。

こうしてみるとこれまでも言ってきたことであるが、身体に低圧低酸素環境ストレスの履歴があるかないか、と云うのが高所登山の体力に影響を及ぼしているように思われるが、如何であろうか。

今回はスポニチの特派員として初めて業務で登山をした。頂上にデジタル・カメラ、一眼レフ・カメラ、ポケット・カメラの3台を担ぎ上げ、デジタル・カメラで撮影した写真はBCからパソコンとインマルサットの通信衛星を使って日本へ伝送した。登ってあたりまえ、頂上の記念写真を如何に伝送するか、と云う業務上のプレッシャーに終始悩まされた。そう云う意味ではこれまでにないしんどい登山を強いられた。好きな山登りは仕事を忘れて楽しみたいものである。

(*1)：1975年秋、エヴェレスト南西壁の初登攀に成功した英国隊の隊長クリス・ボニントンは公式報告書のタイトルを「エヴェレスト、ザ・ハードウェイ」とした。

1. 登山記録

群馬県カラコルム登山隊1997年

総隊長＝星野 光 (65), 隊長＝名塚秀二 (42), 副隊長＝佐藤光由 (36), 後藤文明 (32)

A隊 (G I, G II)

名塚秀二, 宮崎 勉 (49), 馬場保男 (48), 岩崎 栄 (38), 江塚進介 (36), 星野龍史 (29),
品川幸彦 (29)

B隊 (B・P, G I)

佐藤光由, 吉田秀樹 (44), 吉田文江 (41), 梁瀬佐市 (39), 岩崎 洋 (37), 中島剛二 (34),
福本誠志 (23)

C隊 (G II, B・P)

後藤文明, 尾形好雄 (49), 野沢井歩 (32), 寺田 勉 (29), 綿貫 剛 (25), 田島崇行 (20)

(日本ヒマラヤ協会)